

# 日韓関係はなぜこうまで厄介なのか

(平成二十六年九月一日)



拓殖大学総長

渡辺利夫

おはようございます。過分なご紹介をいただきましたけれども、渡辺でございます。

こちらの定例講演会は、大変伝統ある講演会だと伺っております。お招きをいただきましたが大変光栄です。

本日は、「日韓関係はなぜこうまで厄介なのか」というテーマでお話をさせていただくことになりました。私は、中国や韓国とかの東アジアの地域を長らく眺めてきたのですが、日本との関係が、こうまで厄介になってしまったのは初めてのことに思います。もう解きほぐせないんじゃないかと、和解は不可能んじゃないかと思わせるほどまでに、こちらが誤ってしまいました。その事実については、皆さんも新聞等で十分にご存じのではありませんから、ここで私が申し上げるつもりはありません。なぜ、こんなになってしまったのか

という、いわば歴史的・伝統的な要因について、考えているところを申し上げてみたいと思います。

これは韓国だけを、あるいは朝鮮半島だけを取り上げて、日朝・日韓関係を論じてみても、真実はよく分からないですね。やはり、中華システム、東アジアシステムといわれた中国を中心とした伝統的な国際秩序をみないと、理解しづらい。そのシステムにおける日韓・日朝関係がどんなものであったか。それが現在にどうつながっているかという歴史的なバックグラウンドを見ることが必要だと思われまます。この辺りのところを、お話をさせていただけようと思います。そして、最後に現代日韓の係争問題について短くお話を、「いい解が、なかなか見つからない。容易に解を見つけないことが難しいほどに、なかなか厄介だ」という話になって終わると思います。

お手元にお配りしたのはレジュメ（一五二頁〜一六〇頁）です。これをご覧になりながら、話を聞いていただきたいと思います。

長い間、この東アジアには中国を中心とした国際秩序観念が形成されてきたわけですね。その中国を中心に東アジアがどのような構図を描いていたかを表したものが、このレジュメ（二五八頁図一）の丸い円です。これは、中国が伝統的に考えてきた秩序観念のプロトタイプです。非常に単純化して描いたものです。真ん中に「中華」と書いてありますね。「中原」

とも言います。黄河という巨大な川があるのをご存じですね。黄海が河口部になっていきます。この黄河は、黄土高原を源流として河南省・山東省を経て黄海に注ぐ大河です。この黄河の下流域の山東省、中流域の河南省辺りですね。黄河が大きく蛇行している辺り、現在の鄭州をイメージ出来ますでしょうか。そこは、昔は洛陽とも言われた地域です。この地域は、比較的大きな平原です。今の中国の地図では、華北平原と言われている地域です。かつては、洛陽平原とか洛陽盆地と言われていました。そして、ここが「中原」と言われていたんですね。「中原に覇を競う」とか、「中原に鹿を追う」などという漢語的表現を、どこかで耳にされたことがあるかと思えます。ここが中華文明のいわば発祥地であり、漢民族の故郷のようにイメージされているところでもあります。そこを中心にして漢族社会が同心円的に広がっていますね。そして、この同心円がどこかの境界にぶつかると、それが一番太い線に書いてあるところですね。そこから外に出ると、人間の顔をしているけれども人間じゃない連中、怖い連中が住んでいて、時に中華の王朝の力が弱まると攻め込んで来て、財宝・財貨を盗み、女を掠め取って行く蛮族だというふうなイメージで見なされてきたところですね。「蛮族」という言葉をご存知ですね。北は「北狄」ですが、北の蛮族という意味です。「東夷」は東の蛮族、「西戎」は西の蛮族、南は文字通り「南蛮」という意味です。狄も戎も夷も蛮も全く同じ意味です。もう一度言いますと、この「中原」で諸勢力が覇を競うわけです。そ

して、その支配者になった者が、天子様つまり皇帝になる。その皇帝を支配者として、二百年とか三百年つづく王朝を築きます。この王朝を倒して次の覇権を握った人が、また次の天子様になって新しい王朝を築く。そういう王朝の転変史が中国であったということが出来ます。

中原の外に居る蛮族は、なかなか猛々しい存在ですね。「北狄」は、恐らくモンゴルなんでしょうね。騎馬民族あるいは狩猟民族で、年中のように中原に攻め入って来る。そこで古来、「万里の長城」が築かれてきたのです。「東夷」のほうは、農民あるいは漁労民族でしょうね。「西戎」は、草原とかで放牧を<sup>なぐわい</sup>生業とする人種なのでしょう。南に行きますと、焼き畑農業とか漁労の民ですね。それらが、しょっちゅう中原に攻め入って来るのです。そして、しばしば王朝をつくるのですね。一番直近の二つの例を挙げますと、モンゴル族が中国に攻め入って来てつくった征服王朝が「元」です。元朝であります。最も近いのは清朝であります。これは昔の満州、今の東北部にいた満州族、女真族とも言いますが、それが北京に攻め入り、漢族の王朝「明」を倒して、征服王朝として君臨したものです。ですから、日本史を勉強してきた人間からすると、古代があり中世があり近世があり、近代があり現代がある、というふうには、どこの教科書でも歴史は連続性を持ったものだとか教えられ、全ての国がそういう歴史を歩んでいると我々は思わされるんですけども、中国の歴史を見るとそんな

なことはない。やはり王朝の反復転変です。二百数十年、三百年、三百五十年ぐらい続いた王朝もありますけども、その王朝の反復転変史が中国の歴史なんですね。次の王朝が出来る、前の王朝がいかにひどかったものかと、徹底的にそれを否定し、新しい自分たちの王朝の正統性を強調するということです。ですから、われわれが考えているような意味での連続性を持った歴史、百二十五代も続いてきた天皇陛下が今上天皇であることに示されているような連続性を、中国が持っているとは到底思えない。

下の図(一五九頁図2)を見ていただきますと、これが現代の中国ができる前の王朝「清国」の構図です。十七世紀の中頃に生まれた王朝ですね。先ほども言いましたように、満州族が北京に攻め入って出来た征服王朝が「清朝」であります。雍正帝とか、康熙帝、乾隆帝という天子様のお名前は、皆さんもどこかでお耳に入っているのではないかと思うんですけれども、この時代に、中国は史上最大の版図を築いたわけであります。恐らく、当時はGDPなどという統計はありませんから、世界全体のGDPのうち、清国が占めていた比率は分かりませんが、世界の富の三割くらいを占める、栄華を極めた王朝であつたらうと思えます。そして、先ほど言った三人の天子様の時代に、モンゴル、チベット、ウイグルを併合したわけですね。一段と巨大な版図となりました。その三つの地域の面積を合わせると、今の中国の三分の一以上にはなると思いますね。ついでながら申しますと、前の王朝が「明」で

すね。明というのは漢族の王朝ですが、これを満州族が征服して、新しく清帝国が出来たわけですけども、この清帝国の面積は明国の版図の三倍です。われわれ日本人の中には、国土面積というのは古来一定じゃないかという観念があるんですけども、中国の歴史地図帳で見てもみすと、国の大きさというのは、縮んだり膨張したり、年中変わっているんですね。国境は融通無碍ゆうつうむびげであります。その中で最大の版図を築いたのが「清朝」です。その清朝の版図を、今の中華人民共和国が継承しているというところに大きな問題があります。ウイグルもモンゴルもチベットも、漢民族とは人種が違いますよね。宗教や言語も違います。もちろん風俗や習慣も違う。新疆ウイグル自治区で最近テロ事件等が起こっていることを、香港経由の映像だと思えますが、よくテレビで見ますよね。いかにも漢族とは顔つきも違うし、風俗・習慣が全然違うということが、一見すると分かります。そういう異民族を併合してしまつたということです。ついでながら満州ですが、かつての満州は満族の住んでいた地でありますから、いわば清国を征服した満族にとつては、自分の故郷の地です。ここは、清国時代には特別行政区域とされていて、漢民族がそこに移住することは法的に禁止されていました。実際には、不法に人々が出たり入ったりしていたことは事実ですが、フォーマルには禁止されていた地域です。この地域は、どこが主権を握っていたのか、統治権を誰が握っていたかということがよく分からないほど、極めて複雑な地域であります。後に日本が満州事変

を経て満州國を建国することになるんですが、それが当時の国際法から見ると正統性を持つのか否かは、実は結論の出ていない問題ではないというふうに私は思います。中国の論調は一方的なものです。そこは今日の話の主題ではありませんから、やめておきます。

それでは、異民族を包摂したこのような巨大な版図を、清朝はどうやって統治していたんでしょうか。これは、われわれにはなかなか考えにくいですね。レジユメ（一五二頁）の二番目に「冊封体制」という言葉が書いてあります。ちよつと面倒くさい用語を使っておりますが、中国思想史上では大事な言葉ですので書いておきました。「冊封体制」というシステムを持ちこんだわけです。これ以上簡単にはできないほどコンパクトに定義すると、レジユメのようになります。「中華の礼式に服させ、見返りに王位を与えてその王に領土と領民の統治を委ねる伝統的な国際秩序観念」です。ですから、チベット、モンゴル、ウイグルには、チベット王、ウイグル王、モンゴル王という王位を与え、また王様の周辺には専制的な王を支える官僚群がいるわけですが、その人たちには爵位をちゃんと与える。そして、今まであなたが統治してきた領地、その上に住まう領民は、今までどおりにこれを統治して結構ですよと、そういう委任状を出すわけです。その委任状のことを「冊書」といいます。「封」というのは下に土を書き、封土といいます。その土地を統治していいという委任状を渡すわけです。大変合理的なシステムなのではないでしょうか。こんな大きな、異民族を含

んだ異質的な社会を、北京の中央集権的な権力で一元的に縛っていくなどということは、そもそも出来っこない。もつと分権的に分けて治めるやり方つまり「分治」をとったほうがいいと、そう考えたんでしょね。当時は連邦制などという言葉があったわけではありませんが、ある種の連邦制的な統治をやったんだらうと思いますね。

横道にそれですけども、巨大帝国というのは、歴史上そうやって出来たのではないかと思えます。塩野七生さんの『ローマ人の物語』をお読みになった方は多かろうと思えますが、何故、ローマ帝国があんなに巨大になったかということが、面白く書かれています。ローマ帝国が隣国を占領すると、占領地の有力者にその統治を任せます。その占領地とローマ軍がまた一緒になって、もう一つ先の占領地に出て行って、その支配者に統治を任せると、古代において、あれだけの帝国を築いたやり方がよく表れています。ちよつと振り返ると、私どもの隣の中国もそういうことをやっていたということに気づかされるわけです。もちろん一方的に統治を任せるわけではない。任せる代わりに、中央政府つまり北京に朝貢をさせます。朝貢というのは貢物を朝廷にもって行くことです。一つの貢物をすれば、その五倍ぐらいの物品をちゃんと返しますから、これは北京が権威を見せつけるための儀礼なんです。十の値のものももらって三の値のものしか返さないというのでは、沽券コウケンに関わりません、そういう包摂的な対応を取ったわけです。つまり、君臣と臣下の間マの儀礼ですね。儒教

というのは、儀式を体系化したみたいなものです。後でも申し上げますが、儀礼を厳守させるわけです。異民族が中央である北京に崇敬の念を抱いていることを徹底的に儀式化させるというやり方です。強い武力を使わずに、巨大な版図を統治できたのですから、清国というのは、極めて合理的な政治支配のシステムをもっていたということができると私は思います。

ところで、冊封体制は、中国国内の異民族に適用されていたわけではありません。実は、その周辺諸国にも適用されてきました。その典型が朝鮮であり、もう一つがベトナムです。それから、東南アジアにもたくさん国がありましたけど、当時は我々が今日イメージしているような主権国家があったわけではありません。それぞれの城壁に囲まれた都市国家らしきものがいっぱいあっただけです。朝鮮とベトナムは、冊封体制下におかれていました。朝鮮は、清国が成立して以来、独立国家ではありません。実は明国の時代から、すでに朝鮮は独立国家ではないんです。冊封体制のもとに組み込まれていたのです。ですから、国内異民族と同じような取り扱いを、朝鮮とベトナムは受けてきたということでもあります。レジュメレジュメ（二五九頁）の図をもう一回見ていただきますと、朝鮮とベトナムは冊封国・朝貢国に入っています。

日本は中国の文化的な影響圏にあるかのように思われている方がおられるかもしれませんが

が、そんなことはありません。古代国家が出来て国造りをしていくわけですが、そのためのテキストがない。そこで日本は、遣隋使や遣唐使を送って中国の律令国家システム、古代律令国家のシステムを導入したということがあります。漢字も使いました。それが十世紀の頃までです。そして唐王朝が滅亡しますけれども、以来日本は、中国との文化的な交流は全く、なくなったといったほうがいいだろうと思います。もちろんビジネスとして、物の取引とか、そういうことはウインウインですから、これはやったでありましょうけれども、日本が中国の文化的な影響圏にあつたというのは誤りでありまして、中華文明圏の一つだというふうに捉える見方は全く間違いです。

別に權威に傘を借りるわけではありませんが、冷戦崩壊後、世の中がどうなっていくかを心配して、世界の秀才たちがいろんな本を書きました。その中で、唯一現代まで残っていて、今でも時に私どもが参照する本に、もう亡くなられましたがサミュエル・ハンチントンという人の *The Clash of Civilizations*・『文明の衝突』という本があります。この本は、世界の二十七ヶ国語で翻訳されたというんですから、超ベストセラーでした。この本によりますと、世界は八つの文明圏に分けられております。だいたい宗教圏とオーバラップしておりますが、日本は小さくて孤独な一つの固有な「文明圏」であり、八大文明圏の一つだということ、ハンチントンははっきり言っています。日本は大和民族という殆どが同種の民族

で、日本語というある種の孤立言語を使っています。日本語の起源はどこにあるかについては、いろんな研究がありますが、分かったことは、淵源はどこか分からないということ、日本列島だけで使われているという意味で、孤立言語らしいのです。宗教的な対立によって、日本が亀裂するというところはありませんでした。ですから、昨年催された伊勢神宮の式年遷宮、あれは持統天皇によつて六九〇年に始まったそうでありますが、今日まで延々と連続的に二十年に一度、ああいう形で行われてきました。今上天皇が百二十五代万世一系である。こういう連続性を持った独自の日本文明圏だという見方は、正しいのだろうと思います。冊封体制下に置かれたということが、足利時代に一時期あつたということは、これは事実の問題として言っておかなければなりません、これは名目的なものであつて、すぐに終わったというのが事実です。

せつかくですからもう一つ申し上げますと、図二（一五九頁）の枠の外には台湾があります。一番右の下です。これは化外けがわいであります。化外というのは、なかなか難しい言葉なんですけれども、中国の天子様の徳の影響力が、このように外円に広がっていくプロセスを「王化」と言います。徳によつて周辺諸国を強化していくプロセスと言い換えてもいいと思います。その王化の外ですから、その影響力をまったく受けない所で文字通り蛮ばんです。マリアア蚊がブンブン、毒蛇がウヨウヨ、人間の住まうような所ではない、そういう感覚が化外で

す。清国時代になってもそうです。清国時代になると、台湾が福建省台湾府として組み込まれますけども、中国本土の人々、特に官僚は行きたくない所であったようです。要するに、台湾は化外として位置付けられてきた。それが現代の中華人民共和国固有の領土であって、外国人がすべき言うべき問題ではないし、中国の「核心的利益」だと、こう中国は主張しているわけです。これは政治的主張としては分かりませんが、歴史の事実ではないですね。歴史的な事実と政治的主張との間には当然ずれがあるという事くらいで、われわれが中国の現在の主張に与する必要はありません。こんな図柄が東アジアシステムであり、中華システムであったのです。これを引き継いだ清朝が辛亥革命によって倒れ、そこから国民党が生まれ、国共内戦の混乱期を経て一九四九年十月一日に中華人民共和国として生まれ変わり、今日に至るといふ歴史を持っているわけですね。そして、現代の中華人民共和国はこの大清帝国の版図をほぼ継承しており、ここで国民国家をつくろうとしてきたのです。かつてのような冊封体制で、「儀礼さえ守ればあなたの自由にやっつけていいですよ」というふうな寛容なシステムではないわけですね。主権国家という明確な枠組みです。共産党独裁の下で、広大な領土をふんじばろうという考え方がありますから、少数民族から猛烈な反発が起こってくるのは当然のことです。とりわけ最近の新疆ウイグル自治区での一連の爆弾テロ事件等を見ると、その弾圧にはきわめて厳しいものがあることが想像できます。これは、チベットで

もモンゴルでも同様です。ある種の民族浄化運動を展開し進めているようですが、この矛盾は永続的なものであり、中国政府の指導部をこれからも延々と悩ませるテーマでありつづけるだろうと思います。

次に韓国に入りたいと思います。日本との関係でいえば、李朝、李氏朝鮮からです。李氏朝鮮は、歴史書によりますと一三九三年頃、十四世紀の初めに朝鮮で生まれた王朝です。この開祖が李成桂いそんげという人です。この時点においては、中国の王朝は明みんです。清しんはその次の王朝です。明は、漢民族の王朝で、朝鮮に比べれば圧倒的に大きい隣の明に、李氏朝鮮が独立した王朝として認められるのは、容易なことではありません。巨大な明とそのしつぽにチヨコンと付いているのが朝鮮半島です。独立の王朝であることを明に認めてもらうことは、なかなか難しい。であれば、この明国の懐に飛び込み、ある種の属国になって、かわいいやつだと思われるより他ないという悩みを持っていました。それが今も続く韓国・朝鮮の「事大主義」ですね。「事大」主義というのは、大に事つかえると読むのですね。レジユメに書いてありますように、「小を以て大に事つかふるは保国の道也」という考え方です。小国というのは、大国に仕えるより他に国を安んずる道はないんだ。これは朝鮮王朝の開祖の李成桂の文書の中にあるものです。朝鮮という国号を決めたのも明です。その姓の「李い」も明国が決められています。曆こよみや度量衡どりようこうと、何から何まで全て明のものを導入していたのです。先ほども言

いましたけれども、慶事が北京にあれば、あるいはお弔い事があれば、李朝の王様が君臣を引き連れて北京に行く。或いは逆に明の使者が、今のソウルに向かつてやって来るといふことが、しばしばありました。ここに写真があります（一六〇頁上）。北京の方角に向かつて、恩をもって迎える門「迎恩門」が建てられました。これは、現在はなくなって、独立門という別のものになっています。朝鮮と清国との関係を断つて朝鮮を自立させ、日本の影響力のもとでここを近代化して、日本の北の備えを固めるための戦争が日清戦争ですから、勝利した日本がこんな門を許すはずがないわけで、これはつぶされました。しかし、それまではこの門があったのです。写真に写っているんですから、そんな昔のものではないということでもあります。

さて、この迎恩門ですが、例えば中国の使者が、漢城（ソウル）に入ってくるという状況を考えてみましょう。使者はこの門を通って、漢城に来ます。その時に朝鮮王がお出迎えに出るのですが、これを迎恩門の外側でやります。彼らをお迎えした朝鮮王は、迎恩門を迂回してソウルに入る。使者はもちろんこの門を入って来るのです。おもてなしをソウルでいっぱいやって、そして使者を北京にまた、迎恩門でお見送りをするのですが、その時に使者はこの門を通って北京に帰ります。しかし、お見送りをする韓国の王様や重臣たちは、この門の外に出て、お見送りが終わって帰る時もこの門は通れません。そのお見送り・お迎えの時

にやった儀礼があります。現在、われわれが知っている、皆さんが聞いたことがある「三跪九叩頭之礼」です。三跪の跪はひざまずくです。叩頭は頭を叩くことです。一回ひざまずいて、手を地に置いて、頭をコンコンコンと三回打ち付けて立ち上がる。そして、もう一回、また頭を叩く、この動作を三回繰り返すわけですね。そうすると、三回ひざまずいて九回頭を地に打ち付けることになります。どう見ても、これは屈辱的と思えないような儀礼です。私はあなたに徹底的にひれ伏しているということ、儀式化すればそんな形になるであろうということなのでしょうね。

こうした儀礼に表れる朝鮮関係は、「清朝君臣関係」といわれています。朝鮮は清国の臣下であり、中国は朝鮮の君主であるということです。君臣関係ですよね。専門用語で言うと、宗属関係です。宗属というのは、宗主国と属国の関係のことです。こんなにひどい形で、われわれは中国に服属しているのかどうか。こんなことをやっていたら自分たちの身の証しが立てられないと、まともな人なら考えてもおかしくないですね。今の言葉を使えばアイデンティティクライシスが、当然知識人や政治家の中に現れてきてもおかしくないですよ。しかし、それをおかしいと言って無礼なことをしたら、一発でやられてしまうというのが、小国のつらさです。難しいですね。そこで、この構図を何とかして覆したい。その気持ち有一段と強くなったある時期があります。それが、現代の日朝関係を考える上でのポ



イントだと思ふのです。李朝が成立した時点の中国は明です。その明と朝鮮は君臣関係にあった。しかし、明が倒れるわけです。満州族が北京に攻め入って来て生まれた征服王朝が清です。そうすると、論理矛盾が起きますね。非常に厄介な論理矛盾が生まれます。満州族というのは、一番先に見た円心円に表われているように、「東夷」ですね。東の蛮族です。東の蛮族が北京に攻め入って、つくった蛮族の王朝である清に、自分たちが服属するという事はあり得ないと、朝鮮の知識人層が考えたのは当然のことです。そうすると、朝鮮の人々はどうするでしょうね。「蛮族の王朝などに俺たちは服属したくない。崇敬なんかもうしたくない」と、強く感じたのでしょね。かといって、そういう態度を示したら、明国よりはるかに強い清国の軍事力に、一発でハエを叩くようにやられてしまうでしょうね。そこで、朝鮮民族の中には、小さな中華主義という思想が育っていきます。「小中華主義」です。これは非常に鬱屈したものだと思うんです。中華のエッセンスを正統的に継承しているのは、朝鮮半島であって中国ではない、こういう考え方です。中華より中華的たらんと考えたのが小中華主義なんです。もともと中国は冒頭に言ったような秩序観念を持っているんですが、朝鮮の小中華主義は、中華よりもより中華的な観念です。日本などは取るに足りないというよりも、極めて卑小な存在だという侮蔑の意識を非常に強めます。

清国に対しては、あの蛮族が政権を執ったんだけど、中華文明の正当な後継者ではないという侮蔑感を持ちます。しかし、その侮蔑感をあらわにすることは出来ない。そういう意味で、内面と表層との分離と言いますか、思想と現実との分離の中で、朝鮮半島はずっと生きてきました。なかなかつらい国家だったんでしょうね。僕は軽蔑的な意味でそんなことを言っているよりは全くありません。そうしなければ李朝は、一つの独立した王朝として生きていられなかったわけです。王朝として生きていくためには、観念が必要です。われわれは主義やイデオロギーというものをばかにする癖がありますけど、今の韓国そして北朝鮮を含めて朝鮮半島を見てみれば、むしろ観念だけで生き残ってきている国家だという感じですね。世俗にまみれたわが国から見ると、<sup>一</sup>韓国のほうがよほど典雅な立派な国だというふうな、これは半分皮肉をこめてですが、そう思いますね。そこで、レジユメ一五四頁の第二パラグラフに、今言ったことが書いてあります。「現実の国際関係においては清に服属、その儀礼を守りながらこれに事大する一方、内面においては清朝を軽侮する生き方を選択した」と。「表層と内面の分離、葛藤。現実と思想との亀裂」、従って「圧倒的なイデオロギー国家。イデオロギーのみで生存しえた王朝としての朝鮮」と書いたわけですが、なんか今の韓国をほうふつとさせるような話ではないかと思うんです。

さて、その朝鮮半島にとってみれば、今言ったように日本なんて取るに足りない国で、卑小な国なんです。足袋や草履を履いた野卑なる民族だと。そういう言葉が韓国で使われま

すよね。その日本が韓国を侵略し、あまつさえ併合してしまつたのです。こんなことが許されるはずはないというのが、朝鮮の人々のとりわけ支配層の強い観念です。支配層は両班ですけれど、その人たちの持っていた拭い難い観念なんです。日本は一九一一年に韓国を併合し、敗戦する一九四五年までの三十六年間、朝鮮を統治しました。しかし、この統治が、朝鮮の近代化にどのくらい役に立ったかということは、韓国でもたくさん分析されて、日本にも、もちろんたくさんさんの分析があつて、そこで韓国近代化の花が開いたということは、否定できない事実であります。しかし、その事実は現代の韓国では認められない。認めたくない。認めてしまつたならば、アイデンティティクライシスに陥るといふことなんでしょうか。三番目の第一パラグラフにそういうことが書いてあります。「小中華主義の朝鮮が蛮夷の日本によつて併合されたという、両班階層を中心とする『日本許し難し』の認識。過去史清算、歴史清算という問題の立て方。過去を受容することのできない韓国。罪千歳に及ぶとの、現代に継承されている指導者観念。過去史清算、歴史清算」と書いてあります。「過去史清算」というのは、ノ・ムヒョンという大統領の時代に使われた言葉です。その後、イ・ミョンバク、その前にキム・デジュンという人がいましたね。ノ・ムヒョンさんという人がいましたね。それからイ・ミョンバクさんという人があつて、今のパク・クネさん、ご承知のことと思います。ノ・ムヒョンの頃から、「過去史清算」という言葉が言い始められまし

た。そして今日、パクさんは「歴史清算」という用法を使つております。これが、日本人には、よく分からない考え方なんです。

私もこの六月に後期高齢者に入りまして、七十五年も生きてきたんですが、あんなことを何故やつてしまつたのかとか、出来れば否定したい、消し去つてしまいたい過去というものがあります。皆さんも、多かれ少なかれそういう気分はお持ちになつてゐるのではないかと思います。そんなことがなければ、どんなによかつたことか、そういう存在でありたいわけですけれど、そんなことは無理ですよね。善も悪も、美も醜も、聖も俗も、そういう二律背反を抱えこんで今日の私どもがあるわけですからね。それは個人でも、国でも、民族でも皆同じことだろうと思うんです。ところが、いろいろ聞いてみると、どうも韓国には正しい歴史と、いふものがある、かくあるべき歴史と言つたらいいでしょうか、そういうものがある、あつて、他方に、誤つた歴史というものがある。もちろん、正しい歴史の中に身を置きたいわけですね。正しい歴史の中に身を置くためには、正しくない誤つた歴史を、清算してしまおうと、こういうことあります。その清算してしまいたい時代の典型が三十六年、日本の支配統治の時代です。その統治によつていかに韓国の近代化が進んだかなんてことはもうテーマにもならない。今の韓国の清算という考え方は、こういうものなんです。皆さんが首をひねつておられるわけですけども、僕も首をひねります。しかしこれが現実なんです。では、その現

実はどういう形で具体化されているかということですが。

その前に一言これだけ言っておきましょう。パクさんは日本のやった誤りは、千年経っても変わらないよというようなことを、大統領になつてから言っています。「罪千歳に及ぶ」ということですね。永遠に韓国は日本を糾弾するよということなのでしょう。実はこれは朝鮮半島の伝統的な考え方なんです。一ついい資料を見つけたので、レジユメ一五五頁に載せてます。「シャルル・ダレの描写」というところがあります。ダレはフランス人のカトリックの宣教師です。本当に戦闘的な宣教師ですね。この時代は李朝の時代で、完全な鎖国状態でした。外国人と分かれれば殺された時代なんです。そこに数人のフランス人の宣教師が不法に侵入して、韓国でキリスト教を布教して歩くんです。そして、仔細に韓国をウォッチして、どういう手段でかは分かりませんが、ともかく韓国というのはこういう国だという書簡を、パリの邦伝教会に頻繁に送るんですね。その記述をもとに、シャルル・ダレという人が、今の李朝というのはこういう国だというのを書いた本があるんです。平凡社の東洋文庫で、『朝鮮事情』という本として売っております。なかなか面白い読み応えのある本ではないかと思えます。その一部にこういうふう書いてあります。「朝鮮では父親の仇を討たなかったならば、父子関係が否認され、その子は私生児となり、姓を名乗る権利さえもなくなってしまう。このような不幸は、祖先崇拜だけで成り立っているこの国の宗教の

根本を侵すことになる。たとえ父が合法的に殺されたとしても、父の仇あるいはその子を、父と同じ境遇に陥れねばならず、また父が流罪になればその敵を流罪にしてやらねばならない。父が暗殺された場合も、同じ行為が求められる。この場合、犯人はたいがい無罪とされる。なぜなら、この国の宗教的国民的感情が彼に与<sup>よ</sup>するからである」と、非常に明快に書いてありますね。罪千歳に及ぶ、というわけです。ですからわれわれは今、従軍慰安婦問題なんかで苦しめられていますけども、ああいう問題が何かのきっかけで解決するということはありません。あつて欲しいですが、歴史から見る限り、あり得ないということであり得ない。その例証をちよつと挙げて終わりにしたいと思うんです。レジユメの一番最後であります。幾つかの法律が出来ております。ちよつと、おどろおどろしい法律名が書いてありますね。「日帝強制占下反民族行為真相糾明に関する特別法」という法律なんです。これは二〇〇四年三月に超党派議員の提案によって国会通過した法律です。この法律の趣旨は何かといいますと、「日本帝国主義の植民政策に協力し我が民族を弾圧した反民族行為者が当時蓄財した財産を国家の所有にすることにより、正義を具現する」という法律であります。日本は一九一一年から日本が敗戦するまでの三十六年間、朝鮮を大日本帝国として併合したわけです。この時に、日本の統治に協力した朝鮮人がいっぱい居たんです。これは当たり前のことです。ですね。

今、朝日新聞で吉田清治の証言を取り消すという朝日にとっては大変屈辱的なことを、やらざるを得ないはめになっています。日本人が済州島に行つて、あれだけの数の女の子を、かつさらつて来るなんてことが出来るはずですよね。もしやつたとすれば、日本の警官も二、三人は入ったかもしれませんが、ほとんどは朝鮮人の警官のほうですね。そうでなければ、あれだけの数の女の子を幌のあるトラックの中にぶち込んで連れて行くなんてことは出来るはずがないわけですね。そういう人たちは対日協力者ですよ。わずかな日本人である。広大な朝鮮を統治したわけですから、当然その統治に協力した人がたくさんいたはずですよ。それは当たり前のことです。それを対日協力者として、その罪科を暴いてその人を処罰しようというわけです。もちろん、その人が生きていたわけですね。お子さんも生きてないですよ。孫か曾孫ですね。その人たちの持っている財産を没収して、それを国家財産の帰属にしようというのです。なんということでしょう。近代法の一番の原則である事後法の禁止ですね。遡及法の原則の明らかに、明らかかなバイオレーションです。韓国の政治家の法感覚というのは、一驚に値するものだと思います。

それからもう一つ、これは皆さんお聞きかもしれませんが。二〇一一年八月、憲法裁判所が元慰安婦の個人請求権放棄は違憲だという判決をしております。また、現在の新日鉄住金と三菱重工の元徴用工に対する賠償金支払い、これも釜山とソウルの高裁で出されておりま

す。日本が韓国と国交を樹立するために、ものすごい苦勞をしたことは皆さんご存じですね。一九六五年に日韓基本条約が出来て、それによって日韓の国交が樹立し、正常化したということになっております。その基本条約である日韓基本条約は、幾つもの法律から体系化されていますが、その付属条約の一つに、レジユメ一五六頁の一番上に、「両締約国」とあります。日本が韓国に持つていた財産、あるいは韓国人や朝鮮人が持つていた財産、これを、お互いに返し合わなきゃならないということになるんですが、これはそのままにしておこう。中曽根元首相の時に、日本が請求権資金の五億ドル払ったんですから、それでもうちチャラになったことにしよう。レジユメ一五六頁の第二条を読ませてください。下から三行目です。「両締約国は、両締約国及びその国民（法人を含む）の財産、権利及び利益並びに両締約国及びその国民の間の請求権に関する問題が、完全かつ最終的に解決されたこととなることを確認する」となっています。そういうことはもう二度と両国間で議論しないように完全かつ最終的に解決したんだということで調印し、その調印文書は両国の国会で批准されているわけです。国際法ではこれ終わっているんです。車に乗っていると事故が起きたりしますが、小さな事故をいちいち裁判所でやっていたら大変ですから、示談ということやりますね。そして、お前が悪かったから三十万円、お前も少し悪かったか五万円だ。そうすると差し引き二十五万円の示談で決着しようと言って、公印が押されたら、これはもう法的

な拘束力を持ちます。後で、あれが足りなかったからもっと出せとか、もう絶対に言っ  
いけないということになっています。これは非常に分かりやすい話なんですけれどもね。国  
際条約というのはもっと重いはずののですが、こんなことはもう、韓国は考慮の対象にし  
ていません。元請求権や従軍慰安婦問題、それから対日協力者のことも、これが全部、元  
もどつてしまっています。そういう意味では、韓国は法治国家ではありません。法治国家で  
はないというのは言い過ぎですが、こと日本に関する限りは法治国家ではないと言いつ  
しょう。中国・ロシア・アメリカとの関係においては、韓国がここまでひどいとは思いま  
せんが、日本に関してだけは何をやってもいいという観念なんですね。日韓関係の解決・和  
解は、極めて難しいことだろうと私は思っております。

私の友人に、昔は毎日新聞、現代は産経新聞にいてワシントンに滞在し、時に日本に帰っ  
てくる古森義久さんがおります。古森さんは中国や台湾にも駐在したことがある人です。  
「古森さんね。僕はこの地上で容易に和解の難しい二国関係というのは、この世界の中でも  
日韓関係じゃないかと思う。古森さんはたくさんの世界の国の関係を知っているから、日韓  
関係に類するようなものは世界にありますかね？」と、こういう質問したわけですね。彼は  
いろいろ考えた末に、「やっぱり日韓関係だという渡辺さんの説は当たっているかもしれない  
い」と言っていました。これは皆さんご存じだと思いますが、産経の前ソウル支局長の加藤

さんが、セウォル号事件の直後、パク・クネ大統領には空白の七時間があつて、これが何に  
由来するのかというと、朝鮮日報の記事を引用し、元記事もはつきりさせておいて、ウェブ  
サイトで同様の記事を出したら、前者の朝鮮日報のほうは口頭注意でしたけれども、産経の  
ほうは検察が捜査をして起訴し裁判するということになっています。法治国家とは到底言え  
ないわけですよ。日本に対してだけは報道の自由も言論の自由も許されていないという国  
家で、何を言ってもやってもいいということのようですよ。

では、なぜ韓国がこんなに反日的なのか。最後に私の考え方を申し上げて終わりにしたい  
と思います。「渡辺さん、韓国はなぜこんなに反日的なんですか？」と、私はよく聞かれる  
んですよ。そうすると私は、「いやいや、これは別に今に始まったことではありませんよ。  
少なくとも李朝時代、清国が生まれた辺りから、もう小中華主義になって、あの国はほとん  
ど反日的というか毎日的な国だったんですよ」と。「では、今はなぜ一段とそうなんですか」  
と言うものですから、「日本という国が非常に大きな国で世界にプレゼンスを持ち、国際的  
な影響力もあつたかつての時代にあつては、韓国は小さな国で日本にたてつく、日本に対し  
て悔しいと思つてもそんなことはなかなか言えなかった。ところが、一つには、韓国が産業  
国家としてグングン成長して、GDP規模においては世界で第十五位にまでなつたことがあ  
ります。私が韓国のことを勉強し始めた頃は、漢江の周辺にスラムがびっしりと並んでいま

した。当時はこんな貧しい国が世の中にあるのかと思つたものです。今はもう、世界の第十五位の規模を持つに至つた超ハイテクで世界の市場を席卷するほどの国になりました。そういう自信があるんでしょね。そして二番目に、かたや日本は平成不況にはまり込んで二十何年もほとんど停滞状況にあつて、その間に国際的なプレゼンスもどんどん下がつていった。つまり日対の相対関係がどんどん縮まつてきているということにも原因があるのでしょね。それから、三番目は、何よりも伝統的に事大してきた中国自身があれだけ膨大してきています。中国に寄りかかつて事大していれば大丈夫だろうという感覚が、韓国民の中に復元してきているだろうと思うんです。それから、アメリカの力が相対的に弱まつてきたことも影響しているかもしれません。そういう東アジアをめぐるパワーポリティクスの中で、韓国に有利なポジションが生まれてきた。日本が不利なポジションになつて、韓国は安んじて伝統的な反日を表現出来るようになった。そういう空間が生まれているのでしょね。これは韓国に何を言つても駄目だと。結局、日本が真つ当になるよりオプシオンはなしということだろうと思うんです。

日中関係について言えば、例えば尖閣問題についていえば、中国は戦略を持っています。もちろん先ほどお話した伝統的な観念はありますが、もうすでに西沙、南沙つまりベトナムやフィリピンとの間でやつてるように、戦略をもつて着々と実効支配を強めているわけですから。

ね。中国の海軍が出て行つて尖閣を一举に占領するなんて、そんなばかなことは中国はやりません。着々と実効支配の事実を作つていつて、いつの間にかこれは中国であるという構図を作り出す。尖閣についてもそれをやっているわけですね。一举に中国海軍なんか出てきません。まず漁船、そして調査船ですね。そのうちに日本の海保にあたる海警というものが出て来て、だんだん軍らしきものが出て来る。少しずつ少しずつです。しかも、それを二年や三年でやるうというのではなく、十五年、二〇年の長い期間をかけてやるうと考えるのでしょね。そのうち日本の世論もこれに耐えられなくなるという時期が来るかもしれない。そういう非常に合理的な判断をして、着々とこれを守り進めているわけですね。そういうことを伶俐に見てこれに対応するには、抑止力を持つて対応する以外にはありません。そういう意味で、論理は明快だろうと思うんです。集团的自衛権行使容認が閣議決定されたことで、私は一応安堵の胸を下ろしています。政府解釈を閣議決定で変えたというだけの話であつて、じゃあ抑止力を具体的にどうするのか。これは自衛隊法とか周辺事態法とか、法的な解釈をこれから変更しなければならぬ。そのためには、かなり長い政治日程を要するでしょね。いずれにしても、それが抑止力になるはずですよ。ところが韓国に対しては、抑止力という観念は効かない。日本は日米同盟であり韓国は米韓同盟を結んでいるわけで、韓国が日本に攻めてくるといふ構図はあり得ないわけですね。日本が韓国を攻めていくといふ構図は

ありません。つまり、ここには抑止力という観念が成り立たない。そのことを彼らもよく知っていて、日本に対しては何を言ってもいいという感覚を促している可能性もあるわけです。では、一体どこに解があるのか。そこで私は、結局は解がないという結論を申し上げます。それほど難しい問題なんだということを、国民も外交当局もよく心得て、どこに解があるかというそのウエイオブシンキングをこれから鍛えなければならぬ。ここに解があるほどの外交的センスというものが磨かれれば、日本は外交大国になれるんじゃないかとさえ思っております。そんなことで結論のない話を長々とさせていただきました。ご清聴いただきありがとうございます。ありがとうございました。

## 日韓関係はなぜこうまで厄介なのか

### I 中国の伝統的国際秩序観念について—東アジアシステム

#### 伝統中国の国際秩序観念（図1）

●華夷秩序：中華を中心として同心円的に広がり、周縁に位置する人種や民族ほど文明度が低いとみなす古来の価値観。

#### 大清帝国の国際秩序観念（図2）

●冊封体制：中華の礼式に服させ、見返りにF位を与えてその王に領土と領民の統治を委ねる伝統的な国際秩序観念。

#### 大清帝国の後裔としての中華人民共和国

領海法（1992年2月）第2条「中華人民共和国の領地領海は中華人民共和国の大陸とその沿海の島嶼、台湾及びそこに含まれる釣魚島とその付属の各島、澎湖列島、東沙群島、西沙群島、中沙群島、南沙群島及びその他一切の中華人民共和国に属する島嶼を包括する」

習近平党総書記ステートメントのキーワードとしての「中華民族の偉大な復興」「中国の夢」に含意される大清帝国への回帰願望。大清帝国の復興願望。

尖閣・南シナ海「核心的利益論」。東シナ海防空識別圏 2013年11月。

### II 朝鮮の伝統的国際秩序観念について

#### ○清朝君臣関係（「清韓宗属関係」）

事大主義：李氏朝鮮の開祖・李成桂「小を以て大に事ふるは保國の道也」  
明国による、王位、国号（「朝鮮」）の承認。慶弔使の派遣。中国使者の受け入れ。「迎恩門」（添付図）「三跪九叩頭之礼」。

#### ●小中華主義



中華世界を構成する一部、もしくはみずからを中華世界の正統的後継者とする意識の形成。明朝が、朝鮮にとって夷族たる満族（女真族）によって滅亡。漢族による同化を経て成立した満清連合政権の清朝成立。表面的には清国に「事大」しながらも、民族心理の深層においては中華の伝統を正統的に後継するものは朝鮮のみにありとする「小中華主義」の強化。「衛正斥邪」。「大明国之東屏」。

現実の国際関係においては清に服属、その儀礼を守りながらこれに「事大」する一方、内面においては清朝を軽侮する生き方を選択。表層と内面の分離、葛藤。現実と思想との亀裂。圧倒的なイデオロギー社会。イデオロギーのみで生存しえた王朝としての朝鮮。

### III 日本統治への両班階層の反撥

小中華主義の朝鮮（上国）が蛮夷の日本によって併合されたという、両班階層を中心とした”日本許し難し”の認識。「過去史清算」「歴史清算」という問題の立て方。過去を受容することのできない韓国。罪千歳に及ぶとの、現代に継承されている指導者の観念。「過去史清算」「歴史清算」。

#### ●シャルル・ダレの描写（1878年の原著）

「朝鮮では、父親の仇を討たなかったならば、父子関係が否認され、その子は私生児となり、姓を名乗る権利さえもなくなってしまふ。子のこのような不孝は、祖先崇拜だけで成り立っているこの国の宗教の根本を侵すことになる。たとえ父が合法的に殺されたとしても、父の仇あるいはその子を、父と同じ境遇に陥れなければならず、また父が流罪になればその敵を流罪にしてやらねばならない。父が暗殺された場合も、同じ行為が求められる。この場合、犯人はたいてい無罪とされる。なぜなら、この国の宗教的国民的感情が彼に与するからである」（『朝鮮事情』金容権訳、東洋文庫、平凡社、1979年）

●「日帝強占下反民族行為真相糾明に関する特別法」（2004年3月国会通過、”日本帝国主義の殖民政策に協力し我が民族を弾圧した反民族行為者が当時蓄財した財産を国家の所有とすることにより、正義を具現する”）。

大法院判決「元慰安婦の個人請求権放棄は違憲」（2011年8月）。ソウル高等法院判決「新日鐵住金元徴用工に対する賠償金支払い」。釜山高等法院判決「三菱重工元徴用工に対する賠償金支払い」（2013年7月）。

●日韓基本条約（1965年6月22日）の付随条約。「財産及び請求権に

関する問題の解決並びに経済協力の関する日本国と大韓民国との間の協定」。  
第2条「両締約国は、両締約国及びその国民（法人を含む）の財産、権利及び利益並びに両締約国及びその国民の間の請求権に関する問題が、……完全かつ最終的に解決されたこととなることを確認する」

図1 伝統中国の国際秩序観念図

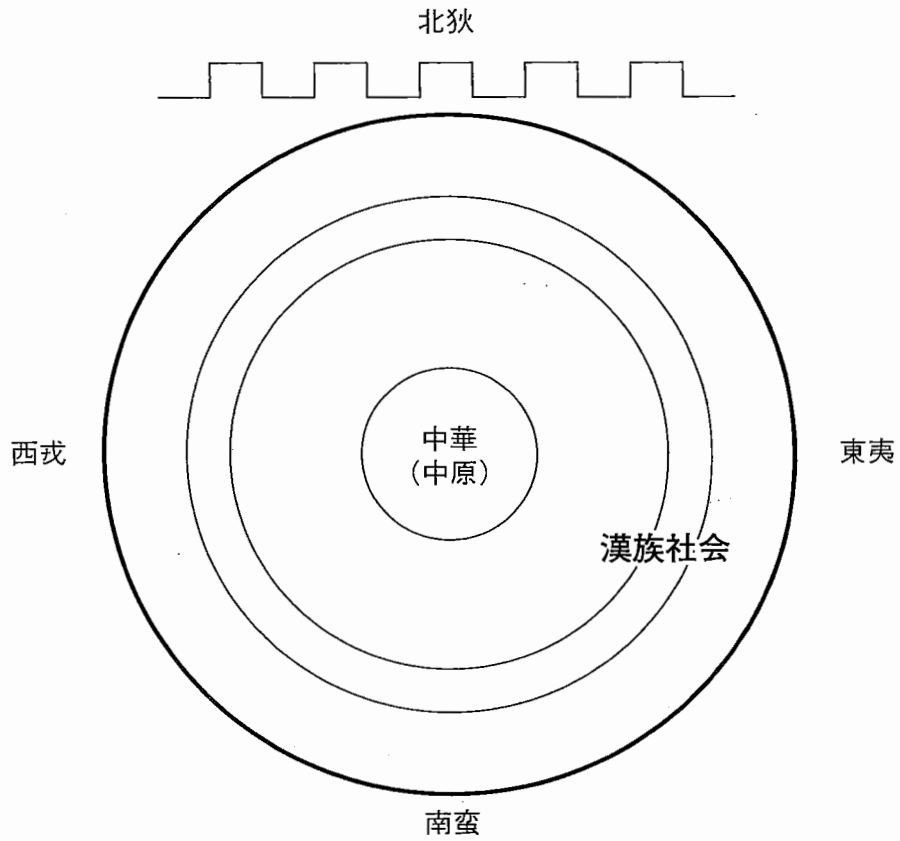


図2 大清帝国の国際秩序観念図

